



見つめられ食われて赤面秋の月

花岡直樹

十一月八日の皆既月食のことだね。太陽光の赤い光は波長が長く屈折して地球の影に入り込むためと聞いていたが、見つめられたためだったのか。



ご鼻頂の家を忘れず焼芋屋

竹下和宏

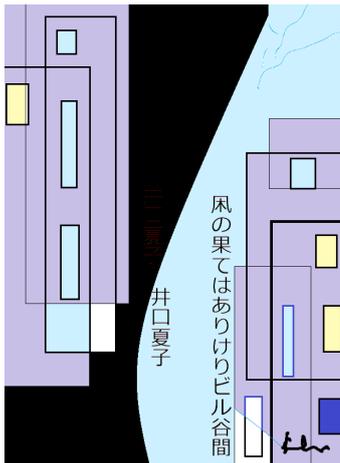
今や空前の焼芋ブームだが、昔は「い～しや～きいも～」と言いながら屋台をひいて売られていた。焼芋屋はどこで何本売れるかよく知っていた。



ヘアピンの指にヒヤリと冬に入る

桑田愛子

俳句は、季節の到来を実感をもって詠む文芸。ヘアピンが指にひやりとは、男性には体験できない実感である。愛子さんはそこにピンと来た。



風の果てはありけりビル谷間

井口夏子

江戸時代初期の俳人、池西言水の名句「木枯しの果てはありけり海の音」の本句取である。言水の句の令和版。無味乾燥な街はどこまでも寒い。



パトカーの隠れてあたる十二月

久松久子

師走はみなさん急ぐから、事故が多い。だから隠れて捕まえる。「パトカーが見えてブレーキ十二月」ということになりがちだから要注意である。



毬栗を握ってみたくなる衝動

赤瀬川至安

危ないのを承知の上で挑戦するものに、バンジージャンプやスカイダイビングがある。強くあらねばならないという深層心理からきているらしい。